
黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

佐藤よしあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒子のバスケ―全てを見通す氷の目―

【Nコード】

N6909Z

【作者名】

佐藤よしあき

【あらすじ】

「キセキの世代」を有し、輝かしい成績を残した帝光中学バスケットボール部。その中において「キセキの世代」と同等以上の才能を持ちながら「キセキの世代」によって目立つことのなかった存在がいた。

「黒子、君は自分が影だと言う。ならば私はこう言おう、私は闇だ。」

プロローグ（前書き）

主人公が少し性格悪いですが、それでもいいなら読んでください。

プロローグ

帝光中学校バスケットボール部

部員数は100を超え、全中3連覇を誇る超強豪校。

その輝かしい歴史の中でも特に「最強」と呼ばれ無敗を誇った10年に1人の天才が5人同時にいた世代は「キセキの世代」と言われている。

「キセキの世代」には妙な噂が2つあった。

「誰も知らない 試合記録もない
にも関わらず天才5人が

一目を置いていた選手がもう一人
幻の6人目がいた」

そしてもう一つ、

「公式の試合においては目立たず
華やかな記録が有るわけでもない
にも関わらずほぼ全ての選手
「キセキの世代」さえも恐怖した
「神の守護者」がいた」

と

プロローグ（後書き）

思いつきで始めました、変なところがあるかもしれませんがご容赦ください。

「こわー！ー！ー！」（前書き）

短いですが1話目投稿です。

「わーーーー!!」

―私立誠凜高等学校では入学式も無事終わり、新入生の部活動勧誘の
声飛び交っていた。

「ラグビー興味ない?!」

「日本人なら野球でしょ!」

「将棋とかやったことある?」

「水泳!チヨーキモチイイ!」

手当り次第に声をかけてくる先輩達に流石に痺れを切らしたのか、

「進めーん?ラッセル車持つてこい!それがブルドーザーでガーッと!」

「10分で5mも動けねえ…。ってか、キレすぎだろ」

とうとう新入生2人組がキレ、大声をあげた。

…もつともこの人混みと喧騒では誰にも聞こえておらず、たいした効果はなかったが。

「勧誘か・・・くだらない。部活動とは自分からやろうという気持ち
がなければ上達などしない。部費確保のためだけにする活動のな
んと無駄なことか。」

聞こえていたら印象が悪くなりそうなセリフを平気でいう青年。

彼の名前は白崎誠。

彼も新入生なのだが、彼に勧誘をかけるものは皆無。

白髪に鋭く細めた赤い目、ぶっちゃけ怖すぎて誰も近づくものはい
なかった。

「バスケ部はどこだ・・・」

「バスケ部ブース」

「じゃ、ここに名前と出席番号ね。」

「はい。あとは・・・出身中学と動機？」

「あ、そこら辺は任意だからどっちでもいいよ。」

（なかなかの逸材ね）

軽いやりとりを済ませた受付の女生徒は先程までいた男子生徒を見て顔を綻ばせ、集まった入部届を数えていた。

「つと・・・今10人目か。もうちょい欲しいかなー。（勧誘の方はどうかなー？頑張つて有望そうな連れてきてよねー）」

「連れて・・・きました。」

と、思った直後男子部員が1人泣きながら帰ってきた。

「（連れて・・・これとるやんけー?!しかも目の前に野生の虎でもいるみたいな迫力・・・!こいつ何者!?)」って、知ってると思うけど・・・」

様々な事を思いつつも説明を始めるがすぐに目の前の青年によって遮られる。

「そーゆーのいいよ。紙くれ。名前書いたら帰る。」

そのセリフに動揺しつつも彼の書いた入部届に目を通す。

「（中学はアメリカ!?!本場仕込みってワケ。火神大我君か、タダ者じゃなさそーね）」

思いがけない逸材に口角があがるのを抑えられない。

と、そこである事に気付き思わず声をもらす。

「あれ・・・?志望動機はなし・・・?」

その呟きに対し青年、火神は無造作に言葉を返す。

「…別にねーよ。どーせ日本のバスケなんてどこも一緒だろ。」
そう言い捨て火神は去っていった。

「すみません、バスケット部のブースはここでもいいのでしょうか？」
「・・・あつ！ごめん。そうよこ、こが・・・」

そうよ、と続けようとしたが相手の顔を見たたん声がとぎれる。

「（こわーーーー！！）」

隣にいた男子生徒も似たような思いなのだろう、若干ふるえている。

「記入しておきました。これからよろしくお願いします。」
「あ、うん。よろしく・・・」

生返事で返し、入部届を受け取る。そして、誠が帰ったとたんに

「こわーーーー！！！！あれで新入生！？」
「（虎の次は才オカミか。猛獣使いはこないかね。）」

若干現実逃避をしていたが、隣に座る部員の声に我に返る。

「一枚入部届集め忘れてるっスよ。」
「え？あ、ごめん、ありがとう」
そう言われ紙を受取りつつ名前を確認するとそこには”黒子テツヤ”の文字。

「（あれー？ずっと帳番してたのに…全く覚えてない）」
と、不思議に思いつつ紙に目を通していきある1点で止まった。

「って帝光バスケット部出身！？って、さっきの白髪も！？今年1年つてことはキセキの世代の！？」

「さっきのヤツはアメリカ帰りだし…今年1年ヤバイ！？」

先輩に騒がれているとは露知らず渦中の1人である黒子テツヤはあ
る場所へ向かっていく。

「きたか、黒子。あいかわらず読みにくい表情だ。」
「すみません。」

お互いに口数が多いとはいえない2人。しばらくにらみ合って、最
初に口を開いたのは白崎だった

「黒子、おまえは高校でもバスケットを続けるのか？」

「はい、そのつもりですが。」

「なんとも無謀な賭にでたものだ。この新設校でおまえの新しい光
を見つけられるとでも？」

「……」

「だんまりか、まあいい。私はおまえを敵にせず安堵している。
これからともに頑張ろうじゃないか。」

「はい、よろしくお願いします。」

「ではまた明日。」

「さようなら。」

（黒子サイド）

誠君が帰った後もじっとその場を動かないで、頭の中ではいろいろ
と考えていた。

なぜ誠君はこの高校へ入学してきたのだろう

彼を敵に回すことがないのは喜ぶべきことだろう

ただなぜ強豪でもないこの高校へ？ほかの5人と同じくらい勧誘はきていたはずだ

僕と同じ考え？

「いや、それはありえないでしょう・・・」

ある意味キセキの世代で誰よりも「アレ」に執着していた。徹底的
とっていいくらいに

「まあ、いくら考えても推測にすぎませんね・・・」

直接聞かないとずっと謎のままだろう。そう結論付けて帰路についた。

「バスケットブース」

「ねえ、これどう思う？」

女生徒は先ほど集めた入部届の一枚、その中の「動機」の項目を男子生徒に見せた。

「ん？なんか変？スポーツやってるやつならだれもが思ってることじゃん。」

「そうなんだけど・・・」

「あれ？こういう考え持つてる奴って好きじゃなかったっけ？」

「なんか変な感じなのよね・・・」

入部届をみながらうなる女生徒。動機欄にはこう書いてあった。

「完全な勝利を手にするために」

くNGシーンく

「ええっ!?!」

「うおっ!?!なにになに!?!」

「ねえ、これどう思う?」

「なにになに・・・」「誠凾の誠の文字が私の名前と同じ、運命を感じました。」あれっ!?!意外とロマンチスト!?!」

「しょうもない運命だわね・・・」

「わーーーー!!」 (後書き)

いかがでしたか？感想もらえるとうれしいです。

「黒子はボクです」

「白崎は私です・・・」
（前書き）

少し長くなりました。

「黒子はボクです」 「白崎は私です・・・」

翌日――

体育館にて・・・

「よし全員揃ったなー、1年はそっちな」

2年生の声で順に並んでいく。

「なあ、あのマネージャー可愛くねー？」

「2年だろ？」

1年生の視線の先には昨日のショートカットの女生徒。

「けど確かに！もうちょい色気があれば・・・」

「だアホー違うよ！」

「あいて！」

バキキツと後ろから突っ込んできたのは眼鏡をかけた先輩。

・・・

「男子バスケットク、相田リコです。よろしく！」

そう言ったのはマネージャーだと思われていた彼女。

「ええ〜！！？（カントク！？）」

1年生の叫びがあがる。

「うるさい……。」

誠は不機嫌だった。

（あっちじゃねーの！？）

1年生の視線は体育館の端にいる杖をついたヨボヨボのじいさんのもとへ集まる。

「ありや顧問の武田センセだ。見てるだけ」

1年生の心情を察してか相田が言う。

動揺する1年生に相田は更なる爆弾を投下した。

「……………じゃあまずは、シャツを脱げ!!」

「えゝゝゝ!!?（なんで!?!）」

「監督権限使った変態行為、なんとも嘆かわしいことだ……」
「そこおっ!!誤解を招くこと言わないっ!!」

しつかり聞こえていたようだった。

そして、言葉通り、上半身裸にされた1年生男子諸君。

はたから見れば異様な光景だ。

「……………なんだコレ……」

その言葉は至極当然な意見だろう。相田は1年生の前を歩く。

「キミちよつと瞬発力弱いね。反復横飛び20sec/50回位でしょ？バスケやるならもうチョイほしいな。キミは体力タイ、フロ上がりには柔軟して！」

次々と指示を出して行く。

「マジ・・・！？合ってる・・・」

「どゆこと！？」

「てか体見ただけで・・・？」

1年生の疑問に先ほどの眼鏡の先輩が答える。

「彼女の父親はスポーツトレーナーなんだよ」

データをとつとトレーニングメニューを作る。毎日その仕事場で肉体とデータを見続けてるうちに身に付いた特技。

【体格を見れば彼女の眼には身体能力が全て数値に見える】

「（なるほど・・・学生で監督を任される力は持っているということですか。）」

少し感心した。しかし上半身裸の男をジロジロみているその姿は、知らない人が見れば十分怪しい。

「！」

次にカントクの眼に止まったのは・・・

「・・・なんだよ？つか寒みーんだけど」

ほかの1年生に比べて頭一つ高い身長を持った男だった。

「（な、なにコレ！？すべての数値がズバ抜けてる……。こんな
の高一男子の数値じゃない！！しかもものびしろが視えないなんて・
・、これは……。天賦の才能！！うっわ生で初めて見る）」

目を光らせて涎まででていた。

「今の姿をみて変態だと思わない方が難しいと私は思う。」

「キミさつきから失礼ねっ！って、おお・・・」

「（さつきのやつと比べると若干劣るけどこっちの数値もズバ抜けてる！！のびしろも視えない……。こんな才能が2人も入ってくれるなんてラッキー♪）」

「カントク！いつまでボーツとしてんだよ！」

はつと気づいて、慌て口の端の涎を拭う。赤い目であきれたような視線を向けられ少し心が痛い。

「ごめんつつでえっと・・・」

「全員視たつしょ。そいつでラスト」

「あっそう？・・・れ？」

相田はどこか不思議そうにしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・黒子君と白崎君がこの中にいる?」

この一言に2年生は沸きだった。

「あ!そうだ帝光中の・・・・」

「え!?!帝光ってあの帝光!?!」

「黒子!!!白崎!!!」

「黒子、白崎いるー!?!」

「(あれー?あんな強豪にいたんなら視りやすぐわかると思ったんだけど・・・・)今日は休みみたいね。いーよじゃあ練習始めよう!」

「あの・・・・すみません」

そう言う相田の前には人影が・・・・・・

「黒子はボクです」

「白崎は私です・・・・」

・・・・・・・・・・。

「きゃあああ!?!」

その悲鳴に他の人達もそつちを見る。

「うわぁ!何?.....うおっ!?!ダレ?」

「いつからいたの!?!」

「最初からいました」

「ウソオ!!?!」

「私に至つてはさつきガン見されていたのだが.....」

「（目の前にいて気づかなかった.....!?!?.....え?今黒子つて言つた!?!ええ!?!?てゆーか.....カゲ薄つすっ!?!そしてそーいえばこの白髪赤目!!なんで忘れてた私!?!）」

「.....え?じゃあつまりコイツらが!?!『キセキの世代』の!?!」

「まさかレギュラーじゃ.....」

3人のやりとりを見ていた部員は黒子と白崎に目をやった。

そしてざわざわと騒ぎだす。

「それはねーだろ。ねえ黒子君、白崎君。」

眼鏡の先輩が2人に同意を求めた。帝光のレギュラーがここにくる

わけがないという思いか、黒子の見た目からありえないと思ったか。だが、2人の返答は・・・

「・・・？試合には出てましたけど・・・」

「控えとしてですが出ていました。」

といった。

「だよなー・・・うん？」

「え？・・・え！？」

「えゝえゝえゝゝゝゝゝ！？」

先ほどよりも更に大きな叫びがあがる。

「「「（信じらんねえゝゝゝ！！！）」「」」

「そこまで驚くことないでしょう。レギュラーでなくとも試合には出られるのですから。」

「あ、ああ・・・すまん」

謝りはするがどこか納得してないようだ。

「ちよっ・・・シャツ脱いで！！」

「え？着ちゃった・・・」

監督に言われてシャツを脱ぐ黒子。

「（身体能力をみたところで意味はないだろう、黒子の能力には関係がない。）」

そんな事を考えつつ、こちらに集まる視線を受け流す。

しばらくみていたがやっと黒子の身体検査は終わったようだ。

「（・・・・・・・・！？）オイちよつと聞きたいんだけど・・・・帝光中とかキセキのなんたらとか」

デカイ赤髪が男子生徒に何か聞いていたが興味がないので無視していた。先輩たちの話を聞いてその日は解散となった。

（MAJIEバーガー）

そこには火神がいた。・・・・トレーに山積みになったハンバーガーを持って。

「（『キセキの世代』ね・・・・・・・・・・、そいつらならもしかして・・・・」

そんな事を考えながら席につくと目の前には・・・

「ぐおっつ！？」

「どうも・・・・育ち盛りですね」

本を片手にシェイクを飲む黒子の姿があった。

「どこから・・・つか何やってんだよ？」

「ボクが先に座ってたんですけど。人間観察してました」

「（こんなのが日本一の・・・！？・・・つか、は？・・・人間観察！？）」

火神は怪訝な顔をした。

・・・

「それより、ちょっとツラ貸せよ。これ食ってから」

火神はそう言った。

（相田 said）

・・・あれはどーゆーこと？

彼は何者なの？

能力値が低すぎる・・・！！

全ての能力が平均以下・・・

しかもすでにほぼ限界値なんて・・・

白崎君ならわかるけど、とても強豪校でレギュラーをとれる資質じゃない……!!

そのことについて白崎君に聞いてみたら……

「黒子のことを言葉にして伝えてもよく理解することは不可能でしょう。実際に試合をすればすぐわかります。」

としか返ってこなかった。

一体——!?

「ストリートバスケット」

「オマエ……一体何を隠してる?」

「…….?」

「…….オレは中学2年までアメリカにいた。コッチ日本戻ってきてガクゼンとしたよ、レベル低すぎて」

黒子は不思議そうにしている。火神は黒子に構わず続ける。

「オレが求めてんのはお遊びのバスケじゃねー。もっと全力で血が沸騰するような勝負がしてーんだ」

……火神の目はまるで獣のように鋭くとがっている。

「・・・けどさっきいい事聞いたぜ。同学年に「キセキの世代」って強え奴らがいるらしいな。オマエはそのチームにいたんだろ？」

火神はそう言うと、バスケットボールを黒子に渡した。

「オレもある程度は相手の強さはわかる。ヤル奴つてのは独特の匂いがすんだよ・・・白崎つていったか？あいつはスゲー、強いやつ
の匂いがブンブンしやがる。が、オマエはオカシイ。弱けりや弱い
なりに匂いはするはずなのに・・・オマエは何も匂わねー、強さが
無臭なんだ。確かめさせてくれよ。オマエが・・・『キセキの世代』
つてのがどんだけのもんか」

火神の目はますます獣じみたものになる。

「・・・・・・・・・・奇遇ですね」

ここに来て初めて黒子が声を出した。

「ぼくもキミとやりたいと思ってたんです。1対1」

黒子が学ランを脱いだ。

そして、勝負が始まった。

――が、

「はあ！？（――しつ・・・死ぬほど弱ええええ！！！！）」

黒子はシュートしても入らなかったりドリブルミスしたりあっさり
ボールを奪われたり、早い話が弱かった。

現在、火神16対黒子0

「（体格に恵まれてなくても得意技極めて一流になった選手は何人もいる。けどコイツはドリブルもシュートも素人に毛が生えたようなもん・・・取り柄もへつたくれもねえ・・・話になんねー！！！！）」

「ふざけんなよテメエ！！話聞いてたか！？どう自分を過大評価したらオレに勝てると思ったんだオイ！」

ついに火神がぶちギレた。

「まさか」

それに黒子は飄々と返す。

「火神君の方が強いに決まってるじゃないですか。やる前からわかってます」

なに言ってるんだコイツ、とでも言いたげな顔であっさりと

「ケンカ売ってるのかオイ・・・！どいうつつもりだ！」

火神が怒りに震えて怒鳴る。

「火神君の強さを直に見たかったです、あと Dank も」

「...はあ！？」

そんな火神にもひるむことなく黒子は続ける。

「（つたく．．．どーかしてたぜオレも．．．。ただ匂いもしねー
ほど弱いだけかよ．．．。アホらし．．．）」

「あの．．．」

「あーもういいよ。弱え奴に興味はねーよ。．．．最後に一つ忠告
してやる」

火神は黒子を軽くあしらい荷物をかついだ。

「オマエバスケやめた方がいいよ。努力だの何だのどんな綺麗事言
つても世の中に才能ってのは厳然として“ある”。オマエにバスケ
の才能はねえ」

「．．．．．それはいやです」

「．．．．．!？」

火神の遠慮のない言葉に黒子は黙ることなく返す。

「まずボクバスケ好きなんで。それから、見解の相違です。ボクは
誰が強いとかどうでもいいです」

「なんだと．．．」

この言葉に火神は怒ったように返す。

「ボクはキミとは違う。ボクは影だ」

「・・・・・・・・・・？」

火神は言葉の意味を理解していない。

黒子はそれ以上はなにも言わずに夜道を歩いて行った――

翌日、外は雨が降っていた。

「ロード削った分練習時間余るな・・・・・・・・・・どーする？カントク」

「（一年生の実力も見たかったし・・・・）ちょーどいいかもね。5
対5のミニゲームやろう！一年対二年で」

「センパイと試合って・・・・・・・・・・！」

「覚えてるか、入部説明の時言ってた去年の成績・・・・去年、一年
だけで決勝リーグまで行ってるって・・・・・・・・・・！！！」

「マジで・・・・・・・・・・！？」

「フツーじゃねえぞソレ・・・・・・・・・・」

先輩達の実力を聞いて、一年はビビっていた。

「（・・・・・・・・・・さうして、ルーキー達はどこまでやれるかな？）」

「ビビるとこじゃねー。相手は弱いより強い方がいいに決まってん

「だろ！行くぞ！！」

「何ともイノシシらしい思考で・・・」

「なんか言ったかコラア！」

そして始まった一年対二年の試合・・・

「・・・・・・・・うおっっ」

ガッン！

「おおっ！！？」

「うわぁマジか、今のダンク」

「スゲー！！！」

一発目から火神はダンクで先制した。

「・・・・・・・・！！（想像以上だわ・・・・・・・・！！あんな粗けずりなセンスまかせのプレイでこの破壊力・・・・・・・・！！）」

「とんでもねーなオイ・・・・・・・・（即戦力どころかマジで化物だ・・・・・・・・！！）」

試合は進み現在11-8、一年がリードしていた。

「一年がおしてる！？」

「つーか火神だけでやってるよ！」

「（んなことより……クソツツ、神経逆なでされてしょーがねー……）」

火神の機嫌が悪い理由……それは。

バチッ

黒子は持っていたボールを弾かれあっさりと奪われてしまった。

このやり取りは試合が始まってからずっと続いている。

「ステイル！？またアイツだ！」

「しっかりしろー！！」

「（意味深な事喋ってた割にクソの役にも立ちやしねえ……ザコのくせに口だけ達者つーのが……）一番イラつくんだよー！！」

イライラしながら火神はジャンプしてボールを弾いた。

「（そして何だアイツはっ！試合始まってからろくに動いてねー……）この程度かつまらねえ」

火神は試合開始からほとんど動かない白崎に対して失望したようだ。

「……！！！」

「高っ・・・・・・・・」

「もう火神止まんねー!!」

「・・・・・・・・わけにはいかなーなー（怒）そろそろ大人しくして
もらおうか!」

キュツツ!!

「3人!?!」

これ以上はやらせないと火神に三人のマークがついた。なぜか顔が
怖い。

「つまらねえとは言ってくれるじゃないか・・・」

「先輩なめるなよ・・・」

「・・・・（怒）」

「ええっ!?! 違っ!（汗）」

さっきのこの程度発言で怒らせたようだ

「そこまでして火神を・・・・・・・・」

「しかも・・・・・・・・ボールを持ってなくても2人・・・・・・・・ボー
ルに触れさせもしない気だ!」

火神が押さえられた結果、試合の流れはあっという間に逆転し15
- 40と一気に点差をつけられた。

「流石先輩達……強いね」

「てゆうーか勝てるわけなかったし……」

「もういいよ……」

諦めの言葉を呟いた相手に火神は突っかった。

「……もういいって……なんだそれオイ!!」

「落ち着いてください」

黒子は火神を宥めるため膝カックンを実行した。

「……!?!」

「手ぬるい、後頭部にハイキックを放て」

「テメ……そして殺す気がっ!?!」

宥めるどころか更に揉め事がヒートアップした。

「なんかモメてんぞ」

「黒子か……そーいやいたな〜」

「（審判の私も途中から忘れてた……んん!?あれ?マジでいつからだっけ!?!……まさか）」

「すみません、適当にパスもらえませんか」

「は？」

「（ようやくか・・・）黒子、こっちも準備はできた。必要か？」

「・・・よろしく願いします」

「がんばれ、あと3分！」

「（てか、もらっても何がきんだよ？せめてボール取られんなよ
～～）」

ボールが黒子に手に渡った時、空気が変わり始めた。

「（この違和感はない・・・？もしかして・・・何かとんでもない事が起きてる・・・！？）」

次の瞬間、黒子が持っていたボールはゴール前にいた9番へとパスされていた。

「・・・え・・・あっ」

ボールに気づくと9番はすぐにシュートを決める。

「・・・え」

「・・・な」

「入っ・・・ええ！？今どーやってパス通った!？」

「わかんねえ見逃した!!」

その後、誰も黒子のパスは止められず流れは再び一転し始めた。

「どーなつてんだ一体!!?」

「気がつくとかパス通つて決まってる!？」

「……!!」(存在感のなさを利用してパスの中継役に!?!しかもボールに触ってる時間が極端に短い!!……じゃ彼はまさか……元のカゲの薄さを……もつと薄めたつてこと……!?)

「ミスディレクション」……手品などに使われる人の意識を誘導するテクニック。

ミスディレクションによつて自分ではなく、ボールや他のプレーヤーなどに相手の意識を誘導する。

つまり——彼は試合中『カゲが薄い』と言うよりもっと正確に表現すると、自分以外を見るように仕向けている。

「こちらも動きますか……9番、5番が4番ヘルプパスをしようとしています。4番は3Pの準備をしています、打たせないで。」

「ええっ!？」

「なっ!？」

全員が驚いた。体制を崩しながらも5番の先輩が4番へパス、4番の位置は3Pライン……驚いて打てなかったが、ほとんど当たっ

ていた。

「（・・・始まりましたか）」

「12番、後ろへパス。13番へのパスは8番からスティールを狙われています！」

自らパスを受け取り、ゴールにせまる。8番の先輩が驚いているのを見るとまた的中。

「何でわかるんだ!？」

「しかも全部!？」

「このシュートは入ります!リバウンドはいりません、戻って!」

「3Pシュートだぞ!？」

外す確率の高い3Pにも迷わず戻る指示をだす。ボールは見事ネットを通過していた

「（これが黒子と白崎の……!!）」

弱いと思っていた二人がこれ程の実力を持っていたという事に火神は驚きを隠せなかった。

「（元帝光中のレギュラーでパス回しに特化した見えない選手・・・！！噂は知ってたけど実在するなんて・・・！！）『キセキの世代』幻の6人目!!そして白崎君・・・彼は多分、全てのプレイを見抜きゲームを完全に掌握する・・・『神の守護者』」

「！！）」

「あッ！！」

「（しまっ……黒子のパスと白崎の指示に気をとられすぎた……！！）」

「火神！！」

火神のマークが甘くなった事により、再び火神が得点を稼ぎ44 - 45と一気に追いつけた。

「うわあ！！信じらんねエ！！」

「一点差！？」

「まったく、どちら片方でもシンドイのに……更に白崎も混ざるとなると（三人組んだ時のこの獰猛さは手がつけらんねーな）」

「っち！！」

「バツ……」

ボールがパスされた先には黒子が待機しており、ボールの奪取に成功した。

「うおお！！」

「いけえ黒子！！」

ゴールに近づき、黒子はシュートを決めに行く。

「勝つ………」

「無理です。」

誠以外勝利を確信したが………

ガボン………

ボールはゴールに入らなかった。

「黒子にパス以外のことを任せてはいけません」

「………だから弱ええ奴はムカツクんだよ。ちゃんと決めろ
タコ!!!」

ガンッ！

火神が最後にダンクを決めて、一年の勝利が決まった。

「うわあああ!!」

「一年チームが勝ったあ!!?」

「ははっ（まあ………味方なら頼もしい限りってことか……
……）」

こうして本日の部活は終了した。

「MAJバーガー」

「・・・・・・・・」

火神が座る席には黒子と白崎の姿があった。

「・・・・・・・・何でまたいんだよ・・・・・・・・」

「ボク達が座ってる所にキミが来るんです。好きだからです、ここ
のバニラシェイク」

「私は黒子に話があるというからつきあっているだけだ。ちなみに
これは爽健美茶だ。」

飲み物を飲みながら対応する

「どっか違う席行けよ」

「いやです」

「黒子次第だ」

「仲いいと思われんだろが・・・・・・・・」

「だって先座ってたのボク達ですもん」

「・・・・・・・・ホラよ」

火神はトレイに積み上げられたハンバーガーを二つ取り、黒子と白崎に投げ渡した。

「？」

「一個やる。バスケット弱い奴に興味はねー。が、オマエのこと、それ一個分位は認めてやる」

「……………どうも」

「悪いが私はいらない、栄養摂取にも気を使っているのね。ジャンクフードは食べる気になれん」

「どこのジジイだよ……………」

「ジジイではない！体のことを考えるのはスポーツ選手として当然のことだ！」

「夜9時に寝て、朝5時に起きて乾布摩擦する人がですか？」

「ジジイじゃねーか！！」

「……………キセキの世代」ってのはどんぐらい強えーんだよ？」

「「「？」」」

「じゃあオレが今やったらどうなる?」

「……………瞬殺されます」

「馬鹿は人に勝てん」

黒子と白崎は即答で断言した。

「もっと違う言い方ねーのかよ……おいこら、白崎!! おまえ人外のバカだと言いてえのか!? (怒)」

「ただでさえ天才の5人が今年それぞれ違う強豪校に進学しました。まず間違いなくその中のどこかが頂点に立ちます(うちも可能性がないわけでもありませんが……)」

「……………ハッ、ハハハ」

「壊れたか?」

「いいね、火イつくぜそーゆーの……………決めた! そいつら全員ぶっ倒して日本一になつてやる」

「ムリだと思います」

「冗談は髪だけにしとけ」

「うおいつ!!! って、白髪のおまえに言われたくねーよ!!」

それぞれの飲み物を飲みながら、二人は即答で言い切った。

「潜在能力だけならわかりません。でも今の完成度では彼らの足元

にも及ばない」

「今のおまえは少し高い位置にいるだけ。本物の化け物にはほど遠い」

「・・・ボクも決めました。ボクは脇役（影）だ・・・でも影は光が強いほど濃くなり光の白さを際立たせる。主役（光）の影としてボクも主役^{キミ}を日本一にする」

「私はバスケットで勝つためにここに来た。化け物には及ばないが、少しはマシなおまえが使い物になることを期待する」

「・・・ハッ、言うね。勝手にしろよ」

「頑張ります」

「わかった、勝手にしよう」

（NGシーン）

「・・・・・・・・もういいって・・・・・・・・なんだそれオイ!!」

「落ち着いてください」（膝カックン）

「黙れ・・・『メリッ』あっ」(膝カツクンで狙いがそれてキック
股間直撃)

「ggsgxjshびうでwkdxk1っ!!!!!!!!」

「火神イイーーーー!!!!」

「すまん・・・」

「黒子はボクです」 「白崎は私です・・・」 (後書き)

どうでしたか？感想ももらえるとうれしいです。

「月曜朝8：40の屋上ね！」（前書き）

白崎の目的がわかります

「月曜朝8：40の屋上ね！」

「朝の教室」

「おーい白崎。」

「降旗君、でしたか？何かご用ですか？」

「おつ、名前覚えてくれたのか。おまえ本人部届もらった？」

「いえ、まだですが。」

「じゃあもらってきた方がいいぞ。俺らまだ仮入部状態だから試合には出られないらしいからな。2・Cの監督のそこ行けばもらえるから。」

「そうなんですか、教えてくれてありがとうございます。」

「どういたしまして。・・・なあ、敬語やめない？」

「すみませんね、初対面の人にはどうしてもこうなってしまってます。」

「あれ？火神は？最初から敬語じゃなかったけど。」

「なに言ってるんです？山猿は人ではないでしょう。」

「ひどっ！？」

く 2 - C ・ 昼休みく

「失礼します、相田リコ先輩はおりますでしょうか？」

「・・・普通だ。」

「はい？」

「いや、さつき立て続けにびっくりしたから、つい。」

「はあ・・・あの二人と一緒にしないでください。大方、火神が大声で「監督！！本入部届けくれ！！」といって勢いよくドアを開け放って、黒子は直前まで気配消して「・・・本入部届け下さい。」とでも言っ、驚いて牛乳吹いたというところでしょうか？」

「そこまでわかるあなたの方が驚きだわ！？」

「二人の性格と少し残った牛乳の臭いから考えればすぐわかります、用件は二人と同じです。」

「はー・・・じゃあこれ、本入部届けね。あ、受け取るのは月曜朝 8：40 の屋上ね！」

「・・・その時間は朝礼が始まる直前ですが？」

「あら、覚えてた？まあ、そのときのお楽しみってことで。」

その場では聞き出せないとおきらめて 2 - C を後にした

「ん？あそこにいるのは・・・」

教室に戻る途中、そこには掲示板に貼られた誠凛学生新聞を見る火神と黒子がいた。

「へー、ここのバスケ部って結構すげー・・・・・・・・のかな？」

「すごいですよ。」

「・・・・・・・・！！！」

突然現れた黒子に火神は声も出ないくらいビックリした。

「テメーは！フツーに出ろ！！イヒヨーをつくな！！！」

「おまえも静かにしろ、図書室前で大声は関心できない。」

「なっ！？コイツがビックリするようなことするから・・・・・・・・！！！」

その横でしーっ、と口到人差し指を当てて火神を注意する黒子。

それを見て火神はついにキレた。

「おちよくってんのか？おちよくってんだよな？オイコラ！」

「・・・・・・・・違います。」

「やばい音が出ているぞ。」

火神は黒子の頭を鷲掴みして握り潰す勢いで握っていた。

「（マジ信じらんねー。普段はカゲ薄いだけのコイツが……バスケットじゃ幻の6人目なんて呼ばれてるなんて……白崎は「キセキの世代」と同じくらい強いって話だし……）」

「白崎君は監督のところに行ってきたんですか？」

本入部届けに視線を向けていう黒子

「ああ、おまえは日常ではもつと存在感を出せ。周りが迷惑する。」

火神が考え事をしてる間に二人は話ながら教室に帰る。

「（……そーいやなんで？他の「キセキの世代」はみんなもつと強豪に行ったんだよね？なんでコイツらは行かなかったんだ？）おい黒子、白崎……」

火神が振り返った時には黒子と白崎の姿は当然ない。

「どーでもいいかそんなこと……まずは……（次会った時ブツ殺そう……）」

メギギ……と音を立てながら火神は手すりを破壊した。

（翌日・月曜 8：40）

「フッフッフ、待っていたぞ！」

屋上では腕を組みながらカントクが待機していた。

「・・・・・・・・アホなのか？」

「決闘？」

「これだけの人数に一人で勝てるなどと思うまい。」

「つい忘れてたけど・・・・・・・・月曜ってあと5分で朝礼じゃないか！」

本日月曜は学生の恒例行事、朝礼である。

「とつとと受けとれよ。」

「その前に一つ言つとくことがあるわ。去年、主将にカントクを頼まれた時約束したの。全国目指してガチでバスケをやること！もし覚悟がなければ同好会もあるからそっちへどうぞ！！」

「・・・・・・・・・・は？そんなん・・・・・・・・」

「アンタらが強いのは知ってるわ。けどそれより大切なことを確認したいの。どんだけ練習を真面目にやっても、「いつか」だの「できれば」だのじゃいつまでも弱小だからね。具体的かつ高い目標とそれを必ず達成しようとする意志が欲しいの」

カントクの表情は真剣そのもので、バスケに対する熱意が感じられた。

「んで今！ここから！！学籍番号！名前！今年の目標を宣言してもらいます！ちなみに私含め今いる2年も去年やっちゃったっ」さらに、できなかった時はここから今度は全裸で好きなコに告ってもらいます！」

『えゝゝゝゝ！！？』

最後の爆弾発言に一年全員が叫んだ。

「・・・・・・・・・・は？」

「（はぁ！？聞いてねー）」

「（いや勧誘の時言ってた・・・・・・・・・・！）」

「（けどまさかここまで・・・・・・・・・・！？）」

「さっきも言ったけど具体的に相当の高さのハードルでね！」「一回戦突破」とか「がんばる」とかはやり直し！」

「（どうしよう・・・・・・・・・・てかマジかよ！？）」

「（しかもコレあとで絶対オコられるぞ）」

ほとんどの一年が戸惑う中、火神は平然とした顔をしていた。

「ヨユーじゃねーか。テストにもなんねー」

火神は柵の上に飛び乗り、早速カントクの指令を実行した。

「1 - B 8番！火神大我！！「キセキの世代」を倒して日本一になる！」

火神は楽々とカントクの指令を完了。

「次はー？早くしないと先生来ちゃうよ（ってアレ？黒子君もダメ？白崎君は・・・）」

「仕方ないですね・・・早めに済ませた方がよさそうです。」

あまり乗り気ではなさそうだが、柵の前に移動して声を発する。

「1 - A 12番！白崎誠！！「キセキの世代」を完全に沈黙させる！！」

大声で叫びさつさと戻る。

「これでよろしいですか？」

「まっ、OKかな。次は？」

「すいません、ボク、声張るの苦手なんで拡声器使ってもいいですか？」

監督の真横に拡声器を持った黒子が登場。

「・・・・・・・・いいケド」

そしていざ目標を叫ぼうとしたその時・・・・・・・・

「コラー！！またかバスケ部！！」

「あら今年は早い！？」

屋上に先生が現れ、バスケ部一同はしばらく説教を受ける結果となった。

（MAJバーガー）

「ちょっと大声出したぐらいであんな怒るかよ？」

「未遂だったのにボクも怒られました……………」

「仕方ないだろう、あのような勝手なまねをすれば怒られて当然だ。」

ずーん、と落ち込む黒子と、白崎の存在に気づき、火神は驚き飲み物を嘔き出した。

「……………店変えよーかなー」

「……………あと困ったことになりました」

「ホントだよ……………ああ！？何！？」

「いきなり約束を果たせそうにないです」

「は？」

「なんかあれから屋上、厳戒態勢しかれたらしくて。入部できなかったらどうでしょう」

「それはない、私と山猿だけなど考えるだけでおぞましい。」

「失礼にもほどがあるぞコノヤロー……それより一つ気になってたんだけど、そもそもオマエらも幻の6人目やら神の守護者なんて言われるぐらい有名だろ？なんで他の5人みてーに名の知れた強豪校に行かぬーんだ？」

一番疑問に思っていた事を火神は二人に向けて質問した。

「オマエらがバスケやるのには……なんか理由あんじゃねーの？」

「……ボク達がいた中学校はバスケ強かつたんですけど」

「知ってるよ（怒）」

「そこには唯一無二の基本理念がありました。それは……」

「勝つことがすべて」

それが帝光の方針であり、そのために必要だったのはチームワークなどではなく、ただ「キセキの世代」が圧倒的個人技を行使するだけのバスケット。

それが最強……でもそこには「チーム」というものが一切なかった。

「6人は肯定してたけどボクには……何か大切なものが欠落してる気がしたんです」

「……で、なんだよ？そうじゃない……オマエのバスケで「キセキの世代」倒してもすんのか？」

「そう思ってたんですけど……」

「マジかよ!？」

「……」

「それよりこの学校でボクは……キミと先輩の言葉にシビれた。今ボクがバスケをやる一番の理由は……君とこのチームを日本一にしたいからです」

「相変わらずよくそんな恥ずかしいセリフばっか言えんな！てかどっちにしろ「キセキの世代」は全員ぶっ倒すしな。白崎はどうしてだ？」

「私は昨日も言ったが、勝つためにここへきた。「勝つことがすべて」という帝光の方針にはもちろん賛成している。」

「そついやさつき6人って……じゃあなんで強豪校に行かなかったんだ？誠凛より強いとこなんていくらでもあるだろ？」

全然わからない、という様子の火神。

「簡単なこと、私の求めているのは「勝利」ではなく「完全勝利」。

帝光時代、すべての試合で勝利した・・・だが、私の力が必要だったかと問われると肯定はできない。」

「は？あんな未来予知みたチカラ使えば・・・」

「強すぎた・・・ということですか？」

火神の言葉を黒子が遮り、白崎が頭を縦にゆらした。

「そう、「キセキの世代」5人の力があればそれで十分。私は良く言えば勝利を100%にできる選手、だが実際は余剰戦力でしかなかったと思う。接戦なんてものは数えるほどしかなかった。」

「キセキの世代」5人が試合をすればダブル、トリプルスコアは当たり前。途中で相手が戦意消失して試合の結果が終了前に決まるなんていうのが当たり前だった。

「ゆえに、私の力を持って勝利する。どうせなら無名の学校で強豪を倒す。それを成せば私自身満足する結果が得られるだろう、それが理由だ。」

「なるほどな・・・」

「もちろん、危ない試合を救ったこともある。無敗の栄光を守る守護者なんて意味の二つ名ももらった。」

1軍だけでなく、2軍以下も負けが許されなかった帝光。その試合へ同行し、危ない時は窮地も救った。無敗伝説を守った誇りもある。しかし、すべて格下・・・十分満足はできなかった。

「もし、私を倒す価値があると思うのならいつでも勝負を受けよう。すべてに勝利することに意味がある。」

おまえには負けない発言に火神は獣のような目で

「上等じゃねーか・・・その言葉忘れるな!!」

ガタツと音を立てて火神は席から立ち上がった。

「黒子、一つ言っておく「したい」じゃねーよ。日本一にすんだよ！」

大量のハンバーガーを残して火神は帰っていった。

「黒子、君は自分が影だと言う。ならば私はこう言おう、私は闇だ。この意味をどう取るかはおまえ次第・・・もちろん受け取り方によつては私を許せないと思うかもしれない。」

「はい・・・」

「おまえに私の考えは受け入れがたいものかもしれない・・・だが、私は考えを変える気はない。」

「・・・・・・・・」

「ではまた明日、ずいぶん長いことしゃべってしまったな・・・私らしくもない。」

そついつて帰ろうとする白崎を黒子が捕まえる。

「ボクに全部押しつけないでください、どうするんですかこのハンバーガー。」

火神が置いていった大量のハンバーガーを指さして言った。

「仕方ない・・・」

ハンバーガーをどう処理したのかは二人のみが知る・・・

???「ハア!?!なんだこのバーガーの山!?!」

翌日、教室内はとても騒がしかった。

「なんだ騒がしいな」

教室にやってきた火神は窓側にできた集団の元へと近づいた。

「・・・・・・・・ハッ!」

グラウンドを見ると、そこには「日本ーにします。」と白線で大きく書かれていた。

「黒子、名前はどした・・・」

「あっ・・・」

後にこれは謎のミステリーサークルとして誠凛高校七不思議の一つとなるのであった。

放課後、バスケ部は練習に励んでいた。

「おい、カントクどした？練習試合申し込みに行くとか言ってたけど」

「さっき戻ったよ。なんかスキップしてたし。オッケーだったみたいスね」

「・・・！！スキップして！？」

一年のその言葉を聞いて主将はギョツとした表情に変わった。

「オイ、全員覚悟しとけ。アイツがスキップしてるってことは・・・
・・・次の試合相手相当ヤベーぞ」

そして噂をすれば何とやら・・・鼻歌を歌いスキップしながらカントクがやってきた。

「あ、カントク・・・おかえりなさい」

「ただいまー！！ゴメンすぐ着替えてくるね」

そのまま更衣室に向かうかと思いきや、カントクはピタリと足を止めた。

「……………あとね、「キセキの世代」いるトコと試合……………組んじやつたっ……………」

爆弾を投下した後、カントクはスキップして去っていった。

「……………!」

「な？」

「……………!？」

「マジ……………!？」

「さて、誰がくるのやら……………」

みんな驚き（黒子含む）白崎は予想以上に早い再会に少しあきれた。

（NGシーン）

「1 - A 12番！白崎誠！！生徒会に入って部費を増額させる！」

「！」

ズコーー！！（バスケット部員全員コケた）

「そういう意味の目標じゃないわよっ！？」

「月曜朝 8：40 の屋上ね！」（後書き）

次回キセキの一人登場です！

『キセキの世代』の一人、黄瀬涼太（前書き）

一人目登場

「『キセキの世代』の一人、黄瀬涼太」

（男子バスケット部・部室）

「あれ？これって……………」

部室から一冊の雑誌、月刊バスケットボールと書かれたものが出てきた。

「この号、黒子と白崎が帝光いた頃のじゃん？」

「おー、一人一人特集組まれてるよ『キセキの世代』」

「黒子は……………記事ねーな。」

「6人目のに……………取材来なかったの？」

「来たけど忘れられました。」

『（切ね——！！）』

取材を忘れられたと聞いて、全員の心の声が一つになった。

「それに、そもそもボクなんかと6人は全然違います。あの6人は本物の天才ですから。」

「あ、これ白崎じゃね？」

「どれどれ……………『キセキの世代』には身体能力で一步劣る

ものの、彼が出場した時点で試合が決する。絶対不可侵の領域を作りあげる「神の守護者」……しっかり載ってる……」

一ページまるまる掲載されていた。

「あれ？そっぴいや本人いないな……どうしたんだ？」

「あつ、今日は担任から手伝い頼まれたから遅れるらしいです。」

同じクラスの降旗が思い出したかのように答えた。

「そっか……ってヤベツ！時間ないぞ！」

「全員早く着替えろ！練習量2倍になんぞ！」

それを聞いてあわてて着替え始めた。

同時刻、誠凛へと足を踏み入れる者がいた。

「おー、ここか誠凛。さすが新設校、キレっスねー」

「見てあの人カッコイ〜」

「背も高……ってもしかしてあの人モデルの……」

キセキ同士の再会は今すぐ目の前に迫っていた。

ーキュッ キュッ ダムッ

その頃体育館ではゲームが行われていた。

黒子からのパスを受け取った火神は相手の右側をドリブルで抜いた。

「いやまだだ！くらいついて…」

そう誰かが言った瞬間、火神は体を逆へ切り返しダンクを決めた。

これには流石に相手も反応できなかった

「うおお！！」

「ナイッシュー」

「すげーな、フルスピードからあの切り返し！！？キレが同じ人間とは思えねー」

「もしかしたら「キセキの世代」とかにも勝ってる………！！？」

「あるかも！つかマジでいけんじゃね？」

「あんな動きそうそうできねーって。」

「むしろもう超えてる！？」

先程のプレイを見て、黒子はふと以前自分が言った言葉を思い出し

ていた。

《今の完成度では彼らの足元にも及ばない》

「とは言っただけど………」

「あれ？黒子どこだ？集合って言ってるのに。」

「あーもー、たまにすげー困るよ。」

「黒子ー！！出てこーい！！」

はつと我に返り黒子は集合場所へと移動した。

「海常高校と練習試合！？」

「っそ！相手にとって不足なし！一年生もガンガン使ってくよ！」

「不足どころかすげえ格上じゃねーか………」

「そんなに強いんですか？」

「全国クラスの強豪校だよ。I・Hとか毎年フツーに出とる。」

『ええっ！？』

初めての練習試合が全国クラスの強豪校と知り、一年は驚くしかなかった。

「それよりカントク、帰ってきた時言ってたアレ、マジ？」

「もちろん！」

「アレ？」

「あれ火神聞いてなかった？」

「海常は今年「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太を獲得したトコよ。」

「（……………「キセキの世代」！！）」

「ええっ！？」

「あの！？」

「（まさかこんなに早くやれるなんてな……………ありがてー！
！テンション上がるぜ！）」

「しかも黄瀬つてモデルもやってるんじゃない？」

「マジ！？」

「すげー！！」

「カッコよくてバスケット上手いとかヒドくな！？」

「もうアレだな……………妬みしかねえ……………」

「ヒクツだな！」

ザワザワ・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・！？ちょ・・・・・・・・・・え？」

気づけば体育館には女子の集団の列がズラリと並んでいた。

「何！？なんでこんなギャラリーできてんの！？」

「あーもー・・・・・・・・・・こんなつもりじゃなかったんだけど・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・アイツは・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・！！」（「キセキの世代」の・・・・・・・・・・なんでここに・・・・・・・・・・！？）」

「・・・・・・・・・・お久しぶりです」

体育館の舞台上、そこにいたのは・・・・・・・・

「黄瀬涼太！！」

「ひさしぶり。スイマセン、マジであの・・・・・・・・・・え」と・・・・・・・・・・てゆーから分待ってもらっていいスカ？」

「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太だった。

「・・・・・・・・・・！！」（こいつが・・・・・・・・・・！！）」

「・・・・・・・・なつ、なんでここに!？」

「いやー次の相手誠凛って聞いて黒子っちが入ったの思い出したんで挨拶に来たんすよ。中学の時、一番仲良かったしね！」

「フツーでしたけど」

「ヒドッ!!!」

黒子はあつさりと仲良し説を否定した。

「すげー、ガッツリ特集されてる・・・・・・・・」

「どっから持ってきた。」

「部室っす。」

いつの間持ってきたのか、一年の一人が雑誌を読んでいた。

中学2年からバスケを始めるも、恵まれた体格とセンスで瞬く間に強豪・帝光でレギュラー入り。

他の五人と比べると経験値の浅さはあるが急成長を続けるオールラウンダー、と黄瀬の事が紹介されていた。

「中2から!？」

「いやあの・・・・・・・・大げさなんすよその記事、ホント。「キセキの世代」なんて呼ばれるのは嬉しいけど、つまりその中でオレが一番下っばってだけスわ」。だから黒子っちとオレはよくイビら

れたよ」

そつつスよねっ、と黄瀬は黒子に賛同を求めるが・・・

「ボクは別になかったです。てゅーかチヨイチヨイテキトーなコト
言わないで下さい」

「あれ！？オレだけ！？」

再びあっさりとそれは否定された。そのとき・・・

「遅れてすみません、今から参加します。」

遅れていた白崎が到着した。

「その声・・・・・・・・まさか白崎っち！？」

「ん？・・・おまえだったか・・・・・・・・」

黄瀬は驚きの表情で白崎を凝視し、白崎は黄瀬を見るなりため息を
はいた。すると黄瀬は感極まった顔をして

「白崎っち~~~~！！」

すごい勢いで突進する黄瀬。それを見た白崎は黄瀬に向かって走り
出す。

『えっ！？白崎ってそんなキャラだっけ！？』

みんなが感動の包容を予想した・・・が

「フンッッッ！！！！」

「ぐはあああ——！！！」

『ええええええええええええ！？』

渾身の力を込めたジョルトブローが黄瀬の鳩尾へと突き刺さった・
・そして崩れ落ちた。

「またつまらぬものを殺めてしまった・・・」

「んなこと言っとる場合か！モロ鳩尾いったぞ！」

「わああ！人がくの字に折れ曲がるの初めて見た！」

「シャレにならんって!？」

全員が混乱していた。が……

「な、殴るなんて酷いっすよ白崎っちゃん……（泣）」

気絶級の拳を入れられたにも関わらず、黄瀬はすぐに復活して白崎に抗議した。

（「キセキの世代」は耐久力も化け物かつ！？）

みんなが「キセキの世代」(の打たれ強さ)に戦慄した。

「くっ！こいつを沈めれば屋上の公約を達成できたと言うのに！！！」

（おまえなら耐えてくれると信じていたさ）」

「本音と建て前が逆つスよ！？そして相変わらず容赦ないっスね！
！」

「完全な沈黙つてそういう意味！？んな物騒なこと認められんわあ
あああー！！！！！！（怒）」

そして白崎は逆エビの刑を受けたのであった。

「さて、それでなにをしにここにきた？」

「いや、そんな股下から顔出した状態で普通にしゃべんないでほし
いっス・・・」

逆エビの刑で曲がった状態から戻っていなかった。

「そんな事はどうでもいいんで早く続けて下さい。」

『（「そんな事っ！？）』

「まあ、白崎っちなら不思議じゃないっスね。」

『（「不思議じゃないのっ！？白崎って一体・・・）』

帝光組の会話にみんな驚いていた。

「黄・後ろ・球」

「!？」

バチィ!

「つと!？」

黄瀬に向かってボールが飛んできた。

「つたゝゝ。ちょ・・・・・・・・何!？」

「せっかくの再会中ワリーな。けどせっかく来てアイサツだけでもねーだろ。ちょっと相手してくれよイケメン君」

ボールを投げたのは火神であつた。

「火神!？」

「火神君!!」

「えゝゝそんな急に言われても・・・・・・・・あーでもキミさつき・・・・・・・・」

少し考えると、黄瀬は上着を脱ぎネクタイを外し始めた。

「よし、やろつか! いいもん見せてくれたお礼。」

「・・・・・・・・!!」

「（見たのか……）」

「白崎っち、ちょい持つてて。」

「仕方ない……そのかわり、おまえの全力を見せる。」

条件を付けて白崎は黄瀬から上着とネクタイを預かった。

「白崎っちに見られるのはマズイっスね……だからこそ燃えるっスけどね!!」

黄瀬は白崎の言葉でやる気満々になった。

「……っもう!」

「マズいかもしれません。」

「え?」

「黄瀬の能力、それは……」

白崎は目を細め、火神と黄瀬を見つめた。

そして始まった黄瀬と火神の1対1……

ーキュッ キュッ ダムッ

「彼は見たプレイを一瞬で自分のものにする。」

「相変わらず、完璧だ。」

「・・・・・・・・なっ！？（しかもこれって・・・・・・・・模倣とかそんなレベルじゃない！完全に自分のものにしてるなんて！！）」

「（ざけんなー！それさつきオレが・・・・・・・・なのに・・・・・・・・ウソだろ！？）」

「うおっ火神もスゲー！！」

「反応した！？」

火神も負けじとくらい付いていくが、力負けして弾かれてしまった。

「がつ・・・・・・・・！？（オレよりキレてて・・・・・・・・しかもパワーム！？）」

「これが・・・・・・・・「キセキの世代」・・・・・・・・黒子、白崎、オマエらの友達スゴすぎねえ！？」

「・・・・・・・・あんな人知りません」

「へ？」

「正直さっきまでボクも甘いことを考えてました。でも・・・・・・・・数か月会ってないだけなのに・・・・・・・・彼は・・・・・・・・」

「これを予想できるのは・・・・私の知る限り一人しか思い浮かびません。そのくらい・・・・」

予想を遥かに超える速さで「キセキの世代」の才能は進化してる！

「ん〜〜・・・・・・・・これは・・・・・・・・ちよつとな〜〜」

「？」

「こんな拍子抜けじゃやっぱ・・・・・・・・挨拶だけじゃ帰れないスわ。」

黄瀬は黒子と白崎の方へと視線を向ける。

「やっぱ黒子っちと白崎っちください。」

『・・・・・・・・！？』

「海常おいでよ。また一緒にバスケやろう。」

『・・・・・・・・なつつ！？』

黄瀬の勧誘に黒子と白崎以外は目を見開いていた。

「マジな話、黒子っちのことは尊敬してるんスよ。こんなところじゃ宝の持ち腐れだって。白崎っちも「キセキの世代」と同等の実力があるじゃないっスか。つか、敵にしたいくないっス！こんな無名の学校じゃもったいないスよ！ね、どうスか。」

「そんな風に言ってもらえるのは光栄です。」

「そこまで評価してくれるのはうれしく思っ。」

二人のその気がありそうな発言に周囲は緊張するが・・・

「丁重にお断りさせて頂きます。」

「一昨日来い。」

「文脈おかしくねえ!？」

黒子はぺこりと頭を下げ、白崎は一言で勧誘を断った。

「そもそもらしくねっスよ!勝つことがすべてだったじゃん。なんでもっと強いトコ行かないの？」

「あの時から考えが変わったんです。なにより火神君と約束しました。キミ達を・・・」「キセキの世代」を倒すと。」

「何度目だこれ言うの・・・私は「完全勝利」を目指している。強い相手に勝ってこそ、それは証明される・・・おまえら「キセキの世代」をな。」

「・・・やっぱりしくねースよ。そんな冗談言うなんて」

「・・・ハハッ（これが「キセキの世代」・・・スゲーわマジ・・・）」

「不気味な笑が多いぞ。」

「ほっとけ!ったくなんだよ・・・オレのセリフとんな黒子（ニヤけちまう・・・しかももっと強えーのがまだ4人もいんのかよ!?!）」

「冗談苦手なのは変わってません。本気です」

二人の様子を見て、白崎は小さく笑みを漏らした。

「オマケ」

「そーいえば白崎っち！どーして行く学校教えてくれなかったんスか！？」

「おまえに教えて『同じところに行くっス！！』なんていわれると迷惑だからだ。」

「ひどっ！？」

「NGシーン」

「白崎っち、ちよい持ってて。」

「わかった………黄瀬涼太の上半身制服＋ネクタイ、一万円からスタートです。」

「二万！！」「三万！！」「三万五千！！！」

いきなり周りにいた黄瀬のファン相手にオークションを始めた。

「やめてええええー！！！！！！」

「なぜだ？新しい制服買えば得するだろう」「五万！！」ほら、よかつたな。」

「そういう問題じゃないっス！！」

「『キセキの世代』の一人、黄瀬涼太」（後書き）

次回、海常戦スタートです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6909z/>

黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

2011年12月26日12時46分発行